
ONE PIECE ~来ちゃいました。はい。~

秋猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE ～来ちゃいました。はい。～

【Nコード】

N2143W

【作者名】

秋猫

【あらすじ】

僕が気づいたらそこは『ONE PIECE』の世界だった。何か良くわからないけど、ここで生きていくのかなそうだ。ってことで、ユラユラと普通の高校生だった僕が『ONE PIECE』で暮らしていく話。

1話 く僕は誰？（前書き）

初めまして、秋猫です。

主人公目線でだいたいは進んでいきます。

ゆったり更新なので、あしからず。

では、始まります！

1話 く僕は誰？

気づいたらココにいたというのが一番あっている気がする。

その日、僕はただ家に帰るためにいつもの道を、いつもどおりに歩いてただけだった。

普通に晴れてて、普通に暑くて、普通に。

ただ、普通な日。

なのに、気づいたらここにいた。

この全面真っ白な、窓も扉もない、あるのは古ぼけた一冊の本だけ、という部屋に居た。

ココがどこなのかも分からないし、どうやって帰るのかというか、どうやってココに来たかも分からない。

「・・・。」

とりあえず、本を開いた。

そこには『いききたいですか？』とだけ書かれていた。

他のページは何も書かれずに、白紙。

『いきたい』ってなんだよ！？漢字によって意味がかわるよ？行き逝き生き・・・どれ！？

ま、他にすることもわかることもないので。

「はい。」

答えてみた。

すると、アラ不思議。

世界がぐるぐる回っている感じがしてきた。

んー、僕死ぬのかな？逝くってしみだったのかなあ・・・。

酔っ、てか酔ってしまいそこで意識が途切れた。

「。。」

誰かの声が聞こえてきた。

「！。」

目をうつすらと開けると目の前には顔。
びっくりして、飛び起きる。
がんっ！

飛び起きたせいで、思い切り男に頭突きをしてしまった。
痛さに顔をゆがめながら男を見ると、何か知っている気がしてならない。

いや、でも、あの人ではないだろう。うん。いや、だってあの方は漫画の世界の人だし。
にしても、かつこいいなあ。。

「大丈夫かね？」

「はい。あの、お名前は？」

「私か？私はレイリーという。」

「！？」

まじですか！？え、やっぱりあのレイリーさん！？じゃあここは『

ONE PIECE』の世界ってこと？

ああ、頭痛がしてきた。僕は平々凡々に暮らしてただけなのに。

「君の名はなんというのだい？」

「……。」

別に無視してるわけじゃない。思い出せないのだ。
名前だけ思い出せない。どうすればいいんだろうか？
すると、レイリーさんが笑い始めた。

「？」

「多分、君の名はゼロだろう。君の容姿はあいつにそっくりだ。」

「あいつ？」

何の話か分からなくて首を傾げる。

レイリーさんは懐かしそうに話し始めた。

1話 く僕は誰？（後書き）

ん、レイリーさんの口調ってこんなでしたっけ？

とりあえず、『ONE PIECE』の世界に来てしまった、主人公。

あいつとはだれなのか？ゼロはなんなのか？

次で判明です。

感想・評価是非おねがいます。

2話　く紹介？く（前書き）

主人公紹介みたいな感じになります。
どうぞよろしくおねがいします。

2話　く紹介？

レイリーさんの話を聞きながら、まとめてみた。

- ・僕の名前はゼロというらしい。
- ・今はもういないけど、レイという僕にそっくりな男が僕のことを「自分が消えたらそのうち自分にそっくりな男が現れる。そいつの名前はゼロ。」と話していた。
- ・レイもある日突然レイリーさんの前に現れた変なやつ。
- ・レイは強かった。
- ・レイによると僕が今もっているノートの空白は勝手に少しずつ埋まっていく。その内容は秘密にすることだそうだ。

こんな感じ？レイリーさんがお茶でも入れてくるといつて、行ってしまったので早速ノートを開いてみた。
本当だ。さっきは『いききたい？』としか書いてなかったのに、今は増えている。

『あなたの名前は“ゼロ”です。あなたはココにトリップしました。前の世界には戻れません。あなたは好きなところに好きなときに行けます。』

と書かれていた。

僕の名前はゼロで合っているらしい。ってか、トリップって・・・まあ、未練はないからいいんだけどさ。

親も小さいころに消えたし、友達もないし・・・。

それよりも、好きなところに好きなときにいけるってすごくない？んー、ために最初に居た部屋へ行ってみるかな？

え？やばい、また世界がぐるぐるした。気持ち悪い。

これ、慣れるのかな？

「・・・。」

帰ってこれた。真つ白な部屋。ノートを開いてみた。
また増えていた。

『ココはあなたの場所です。ココは好きなようにしてください。誰もあなたが招かない限りこれません。』

だそうだ。僕の部屋ってことかな？

あ！レイリーさんのこと忘れてた。。

戻ろう！・・・うえええ、気持ち悪い。

「お？何処にいたのかな？突然消えたから驚いたよ。」

「すみません。」

「それにしても、ゼロくんはあいつにそっくりだ。」

「どこらへんが、似てるんですかね？」

「んー、そうだね。すべてかな？鏡をみるかい？」

鏡を見るとそこには、目が銀色で黒い長髪にスラリと背は高く、男
か女か分からない人がたっていた。

これが、僕か。自分で言っちゃなんだが綺麗だと思う。女に間違われそう。。

「言葉もないか。」

「はい。」

その後、のんびりお茶したりしてから暗くなり帰ることにした。
床に転がり目をつむる。

ああ、本当に疲れた。これから、どうしようかな？とか考えている
うちに寝てしまった。

2話　く紹介？く（後書き）

こんな感じで2話目終了です。なんか、やっぱり書くのへたくそで
すね。。すみません。

コメントなどよろしくおねがいします。

3話 くかつこいっすね (前書き)

更新遅くてすみません；；
なぜか、いそがしかった。

今回はあの男とご対面です。

3話 くかつこいっすね

することがない。暇で仕方がない。

その気持ちをノートにぶつけてみた。

一ページすべてに「暇」と書き込み終わり次ページを見るとまるで僕に答えたかのように、文が増えていた。

『言い忘れてましたが、貴方は強いです。』

・・・は？

僕は自慢じゃないが、小学生にも負ける。

いや、負けた。かつあげされた。僕、高校生なのに。

そんな僕が強いとは到底思えなくて、きつと間抜けな顔をしていると思う。

「強い」とだけ言われてもめちゃくちや困る。

何ができるのかもまったくわからない。

ために、ノートに「どんな風にですか？」と書いてみた。

10分ぐらいたったけど何も増えない。

僕はため息をついてノートを閉じ寝転がった。

ふと、僕が好きなキャラの顔が浮かんた。

「会いたいな・・・」

そう思ったときには、目の前は綺麗な青い空がいつぱいだった。びっくりして、起き上がると周りを屈強な男たちが囲んでいた。

「こいつ、どこからきやがった!？」

「突然あらわれたぞ？」

ざわざわと騒ぎ始める。

「怪しいものではありません。」

「いや、怪しすぎる！？」

信じてもらえない。

少したつとなにやら、物凄い気を後ろから感じた。

つい、僕もそれに警戒して殺気をだす。

すると、周りに居た男たちが数人を残して倒れてしまった。

「おや？そんなに殺気を撒き散らさなくたっていいじゃないか。」

振り向くとそこには赤い髪の男がいた。

そう、シャンクスだ。

めちやくちゃかつこいいい！！

「すみません。」

内心では黄色い声を出しまくりだが、それを閉じ込めて謝る。

そのまま、じーと見つめるとシャンクスがにっと笑った。

笑顔がまぶしいです！先輩！！

って気分だ。

「お前、どこからきたんだ？」

「・・・わかりません。自分の家？ですかね？」

「いや、俺に聞かれてもこまるよ。」

シャンクスを良く見るとまだ左腕があった。

ってことは、今は原作開始前なのかな？

「それにしても、お前綺麗だな。名前はなんていうんだ？」

「あ、ゼロです。シャンクスさん、これからよろしくです。」

「あれ？俺知ってんのか？」

「勿論です。」

そりゃ、ONE PIECE読みまくってましたからね！！
そんなことはいえないが。

「お前は海賊か？」

「いいえ。」

即答する。海賊なんてものになってしまったら死ぬじゃないか。

「ゼロ、酒はいけるほうか？」

「・・・飲んだことはありません。」

「じゃあ、のめのめっ！」

「はあ。」

シャンクスさんのだす酒は甘くておいしかった。

それに、自分が酒に強いことが判明した。

なぜかそのまま船になじんでしまい、一週間ぐらいお世話になって

しまった。

今、一番言いたいことは、、シャunksさんやっぱかつけえ！！
だろっ。

3話 くかつこいっすね (後書き)

何が書きたかつのでしょうか？

書いてて分からなくなりました。

シヤンクスをだしましたが、こんな感じですよね？

次話は何か書こうかな・・・。

コメントなどよろしくお願いします。

4話 く今度は可愛いっすね (前書き)

今回はあの子の登場です!!
引っ張りたいです。

4話　今度は可愛いつすね

「ゼロ、俺たちとフーシャ村に一緒に行くか？」

「フーシャ村ですか？」

フーシャ村って、ルフィの故郷だよな。
って事は会えるのかな？
会ってみたいな。

「ああ、お前に合わせたい面白いやつがいるんだよ。」

面白いやつはルフィのことかな？

「是非一緒させてください。」

僕が言うとシャンクスさんは笑顔になり、ルフィ自慢？をし始めた。
ルフィが自分に懐いてる、ルフィは海賊になりたがってる・・・
本当に楽しそうに話すので、ルフィのこと気に入ってるんだなと良
くわかる。

そうこうしてるうちに、船が止まった。

「着いたんですか？」

「ああ！・・・あれ？」

「どうしたんですか？」

「いや。いつもだったら出迎えがいるんだけどな・・・。」

「・・・嫌われたんじゃないですか？」

ヨヨヨツと泣きまねをしだすシャンクスさん。
大の大人がやるとちよつと。。ごほんつ。
可愛いですねっ。

「？」

村長さんがすごい勢いで走っていくのが見えた。

「いってみるか。」

シャンクスさんたちと一緒に村長さんが走り去って行った方向に向かう。

そのうち話し声が聞こえてきた。

良く目を凝らすとそこには、沢山の男たち（多分山賊だろう）が一人の男の子（ルフィかな？）をよってたかつて暴行しているのを村長さんが止めてるところだった。

「シャンクスさん。」

シャンクスさんのほうを見ると、さっきまでの気の抜けた顔はもうしていなかった。

すたすたとそこへ向かい山賊たちを伸していく。
だが、ルフィが山賊の頭に連れ去られてしまった。

「海へ向かいましょうー！！」

叫び走り出す。

シャンクスさんも僕に追いつき走る。

海に着くと、もう小船がでていてルフィが投げ込まれた。

シャンクスさんがためらいもなく海に飛び込む。

魚？が二人目指して泳いでいる。

このままではシャンクスさんの左腕がなくなってしまう。

でも、僕は泳げないのでどうしようもない。

僕はやけくそになって刀を魚に向けて投げた。

刀はまっすぐ飛んでいき、魚の目に刺さった。

そのおかげか魚の進行方向がずれた。

二人がこちらに泳いできたので岸に上げる。

「ゼロ、ありがとう。助かった。」

シャンクスさんは僕にお礼を言うが、背中から血を流している。

とりあえず、シャンクスさんを医者をお願いして連れて行ってもらった。

ルフィがまだ泣いているので頭に手を置き話しかける。

「もう泣き止みましょう？せつかく助けたのに泣いてたらシャンクスさんが悲しみますよ？」

「でも、おれ ぜいで、じゃんぐずけがした。」

ごめんと謝り続けるルフィの頬に手を当ててこちらを向けさせる。

「ごめんと謝るよりも、ありがとうといったほうがシャンクスさん喜びますよ。きっと。」

「ほんとうか？」

「はい。」

「わかった！」

ぱあっと笑顔になり走り出すルフィ。

多分シャンクスさんのところへ行くのだろう。

そういえばついやってしまったが、原作を変えてしまった。
大丈夫なのだろうか？

ま、考えても仕方ないだろう。

終わったことだし。。

とりあえず、今言いたいことは……ルフィ、めちゃくちゃ可愛
いっ！！

4話 く今度は可愛いっすね（後書き）

終わり片おかしいです。

でも、可愛いですよ？ちびルフィ。

大好きです。

コメントなどよろしくおねがいます。

5話 くなんで、こうなった（前書き）

嵐がすごいですね。

最近眠くて仕方がないです。12時前には寝てしまいます（汗）

5話　く　なんで、こうなった

その後、シャンクスさんはルフィに自分の麦藁帽子を預けると海へ出て行った。

一緒にいかないと誘われたがお断りして、今はルフィと一緒にいる。

良くわからないが、ルフィに懷かれてしまった。

「ゼロ！勝負しようぜー！！」

「いいですよ。」

言うが早いか、ルフィは腕を伸ばしパンチを繰り出す。

でも、まだ扱いなれてないせいかかすりもしない。

伸びてきた腕を掴み引けばルフィが飛んでくるので、そこを殴る。はい、おしまい。

「いつてえよ、ゼロ。」

「まずは、ちゃんと狙えるようにしましょうね。」

「うん。」

頭をさすりながらうなずくルフィ。

「マキノさんのところへいきますか？」

「おうー！」

マキノさんの料理はとても美味しい。

ルフィと食べていると、がぁん！という音とともに海軍のおじいさんが入ってきた。

この人は・・・

「じいちゃん!？」

やっぱり。ガープさんのようだ。

ガープさんはルフィに近づくと、腕を掴み引つ張る。

「ルフィ、これからお前の兄ちゃんのところへ行くぞ。」

「にいちゃん？」

エースのことだろう。もう、そんな時期か。

ルフィが店を出るぎりぎりですこっちに振り向いた。

「？」

「ゼロ！お前も一緒に行こうぜ!!」

面白そうだし、ガープさんは気にしてないし、いくな。

僕は立ち上がり、お代を置いてからルフィの後についていく。山を登り続けると、小屋らしきものが見えてきた。

「ダダン！」

ガープさんが叫ぶと巨体の女の人が出てきた。
ダダンさんだ。

「ガープ！お前が何でココに？」

「わしの孫を連れてきた！」

「まごお！？」

二人は叫びあつて会話をしている。

もう少し音量下げたほうが話しやすいと思うのだが。

ルフィはキョロキョロしてるうちに一点を見て止まった。
そこにはエースがいた。

「エース！こいつはお前の弟だ！」

「弟？」

「エースってのか？お前が俺のにいちゃん？」

ガープさんの紹介に二人は見合う。そのうちエースがルフィにつばを吐いた。

ルフィは怒り出し、エースは森へ消えていく。それをルフィはおつていつてしまった。

元気だなあ、とか思ってみていたら、ガープさんに思い切り殴られた。

「・・・なんですか、いきなり？」

「さっきまでは、ルフィがいたから無視していたが、お前は誰だ？」

「ゼロといいます。よろしくおねがいします、ガープさん。」

につこり笑って挨拶すると、ガープさんは突然なにやら思いついたような顔をした。

いやな予感しかない。

「ダダン、こいつも一緒に頼むぞ。」

「「は!?!」」

「ガープ、何言ってるんだ! あたしりゃ、エースの世話だけでも大変なのにルフィまで、しかもこの男もなんてむ……いえ、喜んで。」

ダダンさんはガープさんににらまれると黙ってしまった。

「すいませんけど、拒否権ってあり「ない。」……わかりました。」

「

即答されてしまった。

ガープさんが意気揚々と帰っていくのを見つめる僕とダダンさん。ガープさんが見えなくなると顔を見合わせる。

「ゼロと申します。これから、よろしくお願いします。」

「あ、いや。」

二人で頭を下げあう。

「なんでもしますんで、申しつけて下さいね。」

「ああ、じゃあ早速だけどエースたちを連れて帰ってきてくれるか

い？」

「分かりました。」

ダダンさんから別れて、森に入っていく。
・・・なんで、こうなったんだろう？

5話 くなんで、こうなった（後書き）

一緒に暮らすことになりました。

ダダンはお母さんみたいでいい人だと思います。

ガープさんのキャラがつかめないます。

コメントなどよろしくお願いします。

6話 く初日もハードっスね（前書き）

更新めちやくちや遅くなりました。。

ごめんなさいm(; ;) m

文化祭に体育祭、片付けに終われました。
疲れた・・・

6話　く初日もハードっスね

森を深く深く進んでいくと、ルフィの声が聞こえてきた。
そこへ向けて走る。

そこには、獣に襲われるルフィと、それを眺めてるエースがいた。
ルフィが今にも喰われそうなので獣に殺気をぶつけて威嚇する。
獣はこっちを見ると冷や汗をたらし、一目散に逃げていった。

「ルフィ、大丈夫ですか？」

「ゼロ！ありがとうな。助かった。」

「はい。エース、ダダンさんが帰って来いだそうですよ。」

「……。」

エースは返事をせずに、小屋のほうに向かって歩き始めた。
その後ろを追おうとすると、ルフィが疲れたらしく立ったまま寝始めた。

可愛い。。とか思いながらルフィをおんぶして行く。

「豪快ですね……。」

小屋に戻ると昼御飯？が準備されていた。

山盛りに詰まれた肉、肉、肉！

ルフィは肉！と喜んで飛びつくが山賊の皆様にあしらわれてたどり着けず食べられていない。

「ほらよっ。お前らの分だ。」

「ありがとうございます。」

「おれもあつちの肉食いたい！」

僕たちの前におかれたのは茶碗一杯の米とコップ一杯の水。

ルフィはそれじゃ物足りないのかエースが食べている肉を指して言う。

ダダンさんがあればエースが捕ってきたものと言い、ルフィにここでのルール？を教えた。

ルフィはそれに納得し、ダダンさんは「これだから、ガープの孫はいやなんだよ、たくましすぎる」見たいな事をいって落ち込んでいた。

「ところで、ゼロはそれでたりるのか？」

「あ、もちろん足りませんが、後で狩ってくれば大丈夫です。」

「あんたも、そのくちか。」

ルフィに返事をしていたらダダンさんがもつと落ち込んでしまっていた。

ふとエースを見ると、外に行くところだった。

「どこに行くんですか、エース？」

「……。」

あ、無視された。泣きたい。

「おれも行く！」

ルフィはついていってしまった。

「・・・じゃあ、僕はダダンさんのお手伝いでもします。何か、ありますか？」

「おお。じゃあ、洗濯を頼んでもいいかい？」

「はい、わかりま・・・すごい山ですね。」

目の前に出された洗濯物の山は僕の背丈と同じくらいだった。
今日中に終わるのだろうか？

「外の水道で洗って。」

外の水道。さむっ！

とりあえず、外にでるとすぐ横に水道があった。

たらいに水を入れ、じゃぶじゃぶと一枚ずつ丁寧に洗っていった。

五時間後には、すべて干し終わり近くの木の上で寝ているゼロの姿があった。

「・・・うう。・・・くるなーーーー！！！！・・・っ！夢か。」
三秒後にはもう寝息を立てていた。

6話 く初日もハードっスね（後書き）

・・・うわぁ。

いつにもまして駄文になってしまった。
すみません。

でも、諦めない
↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2143w/>

ONE PIECE ~来ちゃいました。はい。~

2011年10月10日12時34分発行